

## 【入選】

### 水と生きる

仙台市立郡山中学校

三年 佐藤 詩

キラキラ井とは、宮城県北東部の三陸海岸南部に位置する町、南三陸町のA級グルメで、地元産の海鮮をふんだんに使った見た目も味も豪華な、その名の通り「キラキラ」した井ぶりのことである。

私も一度南三陸町を訪れた際これを食べたことがある。やはり地元産だからだろうか、海鮮の鮮度が高いくらいが宝石のようにキラキラしており、とても美味しかった。

その見た目と味に魅了された私は、インターネットでキラキラ井について調べたことにした。

調べてすぐに、キラキラ井は東日本大震災と関わりがあるということが分かった。

キラキラ井は町おこしの一環として考案されたご当地グルメで、震災前から提供されていたが、震災のときに津波の被害を受け、提供が一時中断された。その後二〇一二年に提供を再開し、キラキラ井は復興のシンボルとなったそうだ。何気なく食べたキラキラ井が復興のシンボルだということを知って、とても驚いた。

東日本大震災。これにより南三陸町は大きな被害を受けた。マグニチュード九・〇、最大震度七のゆれを観測した東北地方太平洋沖地震の被害も大きかったが、津波による被害の方がより大きかった。

死者五百六十六人、行方不明者三百十人。津波の高さは三階立て庁舎屋上を二メートルも上回ったそうだ。

当時、防災対策庁舎では繰り返し「高台へ避難してください。」と防災無線で呼びかけ続けていたそうだが、そこに避難していた約三十人のう

ち、助かったのはわずか十人である。なんて悲惨なことだろう。

このように水は、人に害を及ぼす。が、逆に人が水に害を及ぼすこともある。

近年、地球温暖化による海水温の変化が、魚などの水生生物のすみかに影響を与え、漁獲量の低下をまねいているそうだ。

地球温暖化の進行には様々な原因があるが、エネルギー発電による温室効果ガスの排出など、人的要因が多い。このまま温暖化が進み漁獲量が減少してしまうと、あのキラキラ井や私達が普段口にしている魚はもう食べられなくなってしまうかもしれない。

私は、キラキラ井を通して、水の「恵み」と「災害」の二面性について学んだ。

東日本大震災の津波の被害など、水は人に害を及ぼし、時には多くの人の命を奪う「災害」となる。一方、水は農業や漁業など、私達の食や生活を豊かにする「恵み」であり、生きることにかかすことのできないものもある。

しかし、私達の今の生活のままでは、水の恵みに大きな影響を与え、結果として人類に害を成すのだ。

水と共に生きること。それは、私達が普段何気なく送っている生活だが、多くの課題もある。その課題を解決し、未来につないでいくには、水がもたらす災害と恵み。そして、人が水に与える害。これらの観点で水と向き合い、考えていくことが大切なのではないだろうか。

未来にキラキラ井をつないでいきたい。

私は今日も水と生きる。